

## 助成活動実績報告書

企画名	岡山県日生地域における海の歴史が育んだ地域知にもとづく里海像の設計
団体名	トケ化エリカト <sup>ウ</sup> ホウジ <sup>ン</sup> サトウヅ <sup>ク</sup> リ ケンキュウ <sup>カイ</sup> ゴ 特定非営利活動法人里海づくり研究会議

### ①活動の目的について

岡山県日生は、我が国の藻場・沿岸環境再生の端緒を開いた地域であり、漁業者による沿岸管理、漁業者発の技術の市民活動への伝播という面からも、多角的に興味深い漁村であり沿岸地域である。特に、アマモ場再生の優良事例や海ごみ対策の先駆者として広く知られ、五味の市の開設など6次産業化などへの取組にも目を見張るものがある。そこで、日生の沿岸環境活動の歴史を明らかにし、「里海」の在り方・人と海の関係性を実証的に捉え、これからの里海づくりの推進に向け、里海像の設計手法の構築に役立てることを目的とする。

### ②内容について（学習会、集会などは開催日や内容、参加者数など。設備・物品購入などの発注、納品、竣工、支払いなどの案件に関わる事実の掲載）

岡山県は“吉備の国”の古代から、海を通じて地域間交流が盛んであった。中世以降の瀬戸内海の海運では、日生の漁業者は「水主」としても活躍してきた歴史がある。個人は歴史に名前が残りにくいため把握が困難であったが、日生の漁業者は集団として地域外の人たちの物流などの仕事を引き受け、地域を外から見る機会が多かったと考えられる。日生の漁業者は地先の海をベースとして、全国規模の漁業者や沿岸環境関係者とのネットワークを築いてきた。この Act Locally, Think Globally は、日生の歴史の過程で育まれてきたのであり、漁業者が水運の現場を担う“水主”として、西日本を中心に広域的に働く機会があったため、全国の情報収集や人的ネットワーク形成を行ってきたと考えられる。これらの史実を紐解きながら、NPO 里海づくり研究会議の理事である九州大学大学院工学研究院環境社会部門生態工学研究室の清野聡子准教授が主体となり、現地踏査、ヒアリング、既存資料の分析などで、地域社会環境と歴史を対象とした仮説・検証型調査研究を実施した。

おかやま環境ネットワークからの助成金は、2013年8月12日に実施した九州大学清野聡子准教授による日生の伝統漁法であるつぼ網漁師からのヒアリングや現地踏査、8月27日に実施した九州大学柳哲雄特認教授によるつぼ網及び底びき網漁師から6名からのヒアリングや現地踏査にかかる旅費、GISによるデータ収集解析のための岡山県日生周辺海域及び陸域連続立体地形図の作成にかかる物品購入、製作人夫賃などに充当させていただいた。

### ③この活動によって達成された成果

調査地の日生と申請者ら NPO 里海づくり研究会議のメンバーとはこれまでの長年の調査、研究開発を通じて沿岸環境の保全・再生の同志である。日生では、平成 14 年からの海洋牧場づくりがきっかけとなり、平成 18 年に漁協が中心となった海洋牧場適正利用協議会が設立された。平成 22 年には備前市沿岸域総合管理研究会に再編強化され、地元商工会や観光協会、備前市、岡山県、内外の科学者など幅広い関係者が参画し、海洋牧場の適正利用など持続可能な里海を模索している。平成 24 年 5 月には、漁協、岡山県、生活協同組合おかやまコープ、NPO 法人里海づくり研究会議で 4 者協定を締結し、流通消費部門、一般市民との連携も強化された。水産環境の保全・再生と持続可能な漁業は社会的に重要な課題となっている。これまで自ら積極的に海に関わり、「里海」と呼ぶに相応しい“人と海との共生”を果たしてきた日生、その詳細分析と他の事例との比較研究は今後の実践研究の礎になるものである。

### ④今後の計画・展望について

「小規模農業・漁業者による環境保全や気候変動の観測」、「沿岸環境保全を担う人材育成」は、生物多様性・海洋環境の国際会議の議題となっており、この研究は、2014 年に岡山市において開催される国連 ESD 国際会議の範疇にも入るものであり、2014 年 10 月に NPO 法人里海づくり研究会議が中心となり国連 ESD イベントとしてシンポジウムの開催が決定している。

また、これらの日生の取り組みは、里海の実証的事例として全国各地への波及が期待されるだけでなく、この度の研究で明らかになった歴史的背景の裏付けを得て、日本型 MPA (Marine Protected Area : 海洋保護区) の代表的な優良事例として、また漁業者主導の海洋空間計画の実践例として国際的にも高い評価を受けるであろう。